

令和3年 4月 1日

令和2年度 特別の教育課程の実施状況等について

宮城県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
気仙沼市立鹿折小学校	気仙沼市教育委員会	公立

1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の 公表ウェブサイト名・URL 等	学校関係者評価結果の 公表ウェブサイト名・URL 等
気仙沼市立鹿折小学校	学校関係者・管理機関に報告	学校関係者・管理機関に報告

2. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

地域の環境，産業，伝統，文化，暮らしなどを関連付け，被災地という特性を踏まえた探究的な学習を行う新たな領域「海と生きる探究活動」の時間を新設する。「海と生きる探究活動」は，小学校3年生から小学校6年生において，総合的な学習の時間と国語，社会，理科の一部を組み替えて教育課程を編成する。

「海と生きる探究活動」においては，生産者や事業者，地域の実践者等との交流や学び等の機会を積極的に活用し，海や海とつながる川や山などの環境，産業，暮らし，伝統・文化などを関連付け，科学的及び社会的な分野において生きて働く「知識・技能」，未知の状況に対応できる「思考力・判断力・表現力」を育成するとともに，学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性の涵養」を図る。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

本市は，東日本大震災の被災地域であり，沿岸地域には甚大な被害があった。このことを踏まえ，平成23年に「海と生きる」をキャッチフレーズとした震災復興計画を策定した。この震災復興計画では，本市の将来像として，地域の特色を生かした水産業及びその関連産業，豊かな食を生かした観光業などにより，持続発展可能な都市を目指している。東日本大震災の被災地としての経験と復興から地方創生を図り，「海と生きる」を実現するために，気仙沼市教育大綱において3つの基本理念とその実現に必要な力を定めた。基本理念としては，「人を思いやる優しさ」と高い倫理感，豊かな感性，「自立し創造的に生きていく力」，「郷土に貢献し，世界で活躍するためのグローバルな視点」の3つを定めている。理念の実現に必要な力を，F・I・S・H（=Foresight「先を見渡す力」，Insight「本質を見抜く力」，Strategy「道を切り拓く力」，Harmony「つなぐ力」）の4つの観点で整理した。

このような，「海と生きる」という市の施策や教育の理念に基づいた教育の展開を

進めていくために、これまでの教科・領域の学習や関連を図っただけの学習では不十分であるとする。新設の教育課程においては、海とともに暮らしがあるという本市の歴史と文化、産業等とともに、被災地として、復興と新たなまちづくりを進める人々の営みにふれる学習を通して、海を中心とした地域の自然や人々に親しみながら地域を知り、地域や日本のよさや様々な資源を守り、よさや資源を上手に活用して社会に貢献することを学ぶ。この学びを通して、生きて働く知識・技能の習得を図り、「先を見渡す力」と「本質を見抜く力」を育成することで、未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力の育成を確かなものとし、「道を切り拓く力」と「つなぐ力」を備えた学びに向かう力と人間性の涵養を目指していきたい。

以上のようなことから、本市では、これまでの教科・領域の枠を超えた新たな教育課程の編成に基づく教育の実施が必要である。

(3) 特例の適用開始日

令和2年4月1日

(4) 取組の期間

令和2年4月1日から令和7年3月31日

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ・計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

3年生以上で教科・領域の横断的な「海と生きる探究活動」年間指導計画デザインシート（プログラムチャート）を作成し、海に関わる「生命」「環境」「安全」について、課題設定、課題探究、発信の流れの中で系統的に学び、児童の生きる力を高めていくことができるようにしている。本領域の学習を通し、気仙沼の地域性、環境、文化に関心をもち、自分とのつながりに目を向けながら、主体的に課題を解決しようとする姿を目指してきた。中学年では、気仙沼の人々が大切にしてきた宝（自然・文化・伝統）について学んだり、地域の川の環境や水が育む命について調べたりするなど、実際に自然の中で多様な生き物に触れる経験や、祭りなどの由来、海とのつながり、気仙沼の伝統を守る人の思いについて知ることで、上学年で学習する「海との共生」についての基礎を培うことができた。また、上学年では気仙沼の基幹産業である水産業やスローフード運動など震災復興のスローガンである「海と生きる」まちづくりを取り上げ、「海とのつながり」を深く考えさせるとともに、自分たちにできることの行動化も目指してきた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響から、計画ど

おりに校外学習を行えない活動があったり、対面ではなくリモートでの調査・講話に変更したりするなど活動が制限された。そのため、課題の本質に深く迫ることや、多面的な調査活動ができず、考えを深めることが難しく課題が残った。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ・実施している
- ・実施していない

<特記事項>

2月に「海洋フォーラム in 鹿折」を実施し、保護者や地域に特別の教育課程での学習の成果を発表する機会を設けている。また、11月に開かれた「海洋教育こどもサミット in 気仙沼」、2月に行われた「全国海洋こどもサミット」等で、市内や他地域の小中学校、協力していただいた企業や大学等に発信する活動を行った。コロナ禍のため、対面ではなくオンラインの発表の形とした。

学校HPにおいて、「海と生きる探究活動」の意義や内容、実際の活動について随時発信している。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

自分の『問い』をもち、課題について学ぶ必要性和道筋を理解しながら他者と協働して学習を進め、自己の生活の在り方を考える児童を育成するために指導を続けた結果、多くの学年で変容が見られた。6年生では気仙沼で見られた地球温暖化の影響の一つ「さんまの不漁」を課題として探究活動を進める児童がいたり、人口の減少が進む気仙沼市の問題を解決するために、スローフードに焦点を当てて、気仙沼市の魅力を他地域に発信したりする児童が見られた。5年生では気仙沼の水産業の学習をしてきたが、昨年には見られなかった、マグロの水産資源を守る取組について調べ、まとめた児童もいた。学校で学んだことを環境保護のために実践したり、地域で生活している中で生じた疑問を学校での学びと関連付けながら解決しようとしたりする探究的な姿は、今後につながる成果だと考える。個人毎に課題を設定し、他者と協働的に学習する活動を教科横断的に系統立てて行ってきたことで、昨年度まで限定的だった課題を当事者意識をもって捉え、考える児童の姿が、様々な教科・領域において各学年に広がってきた様子がうかがえる。

一方、探究的な学びを通して高めることができた力について、児童自身がその伸びを実感として捉えることができたかについてはまだ課題が残る。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

学ぶ目的や内容に応じた探究の仕方やまとめ方、表現を工夫しながら自分の考えを、筋道を立てて分かりやすく説明する力を高めるために、思考ツールを活用した活動を行ってきたところ、課題の解決につながる筋道をイメージして協働的に学ぶ児童が増えた。具体的には、付箋を活用しながら友達と協働的に課題の原因や背景、影響などのつながりについて考え、模造紙や発表スライド等に整理して他者に伝える姿が見られた。11月に開かれた「海洋教育こどもサミットin 気仙沼」、2月に行われた「全国海洋こどもサミット」、「海洋フォーラムin 鹿折」等で、他地域や保護者、協力していただいた企業や大学、地域の方々に発信する活動を行うことで、相手意識をもって伝えようとする意欲も高めることができた。各発表会ではタブレットを使いながら、スライドで説明したり、動画を作成して映したりするなど、発表する内容に応じて、発信する方法を工夫する様子も見られた。今年度は実質的にタブレットを活用できるようになったのが1月半ばであったことから主に発信する道具として活用したが、調査活動や児童同士の考えを練り合う活動でもこのようなICT機器を活用していきたい。

5. 課題の改善のための取組の方向性

3、4に示すような課題を踏まえて、探究課題の解決を通して身に付けさせたい資質能力の具体化、明確化という方向で本特例の改善を図ることが必要と考えられる。そのためには、「海と生きる探究活動」での各課題の探究を通して具体的に「何ができるようになるか」を明らかにするとともに、児童と教師が学びを「振り返り」「見取る」フィードバックの場面を指導計画に位置付けるなど適切な評価の在り方を探していきたい。

さらに、児童が伸びを実感できる自己評価の在り方の検討、児童の課題意識を継続・深化させる支援と工夫を行っていきたい。

6. 実施の具体の情報

本ホームページ内の「気仙沼市の海洋教育2020 実践記録集」で公開